
彼女にはかなわない

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女にはかなわない

【Nコード】

N3743B

【作者名】

月姫

【あらすじ】

平次と和葉に新一と蘭。4人の高校生のコメディ系の短編を集めました。全6話。基本は幼馴染ですが、時間軸はバラバラなので、どこことなくお付き合い中の匂いもほんのりとアリ。軽い気持ちで読んで頂けると嬉しいです。

温泉は好き？

温泉である。

特に老舗と言うわけでもなく、最近流行のタイプでもなく、山奥の秘湯と言うわけでもない、ちよつとばかり田舎にある小さな温泉宿である。

その雰囲気からは少々浮いた4人組。

東西高校生探偵と、そのお目付け役を自任する幼馴染たち。

何でこのメンバーが揃ってこんな所にいるのかと言うのはこの際置いて、とにかく温泉なのである。

そして、温泉と言えば『浴衣での卓球』。

お約束である。

「結構広いね」

「それに貸切やん」

『遊戯室』と書かれた部屋は、この宿に相応しいまさしく『遊戯室』という雰囲気だったが、きちんと手入れはされているようで、置いてある物は古いがその古さはどこことなく温かみを感じさせて、女性陣のお気に召したようだった。

「いくよー！」

「蘭ちゃん強いー！」

女同士、男同士、幼馴染対決。

ひとしきり遊んだ後、蘭が切り出した。

「ねえ、ダブルスやろうよ」

「ダブルス？」

「うん。あたしと和葉ちゃん、新一と服部君で、男女対抗戦」

「それいい！」

「俺たちが勝つに決まってるだろう？」

「わかんないよお？」

「ねえ？」

悪戯っぽく笑う彼女たち。

何を企んでいようと、簡単にあしらえるだろうと、男たちも渋々ながら同意した。

「新一く！いくよく！」

「俺か？」

「当然でしょ？そくれっ！！」

「まて！」

「えいっ！！」

「わあっ！」

白いピンポン玉は、蘭から新一へと送られた。

と言う事は、新一は和葉に返す事となり、和葉は平次に、平次は蘭に回す事になる。

これが自分の幼馴染に対してなら手加減などせずに思いっきり走り回らせてもいいのだが、相手がライバルの彼女（予定）では後々いろんな意味で面倒な事になりそうで、彼女としては必要以上に気を使うはめになる。

結果、彼らは幼馴染の容赦のない打球を受け止め、打ちやすい球として返すと言う高等テクニクを駆使しなければならず、身体的

にも精神的にも疲労困憊する事となった。

それこそ、ひらめく裾から覗く魅惑的な足とか、いい具合に乱れた襟から僅かに見える胸元とかを堪能する事も出来ない程に。

「楽しかったね」

「うん」

「つ……疲れた……」

「……」

ジュース片手に上機嫌な彼女たちと、力尽きたように床にへたり込む彼ら。

「晩ご飯までもう少し時間あるし、もう一度お風呂入って来ようか？」

「せやね。汗も流したいし」

「晩ご飯は『楓の間』の方に運んでくれるって言ってたから」

「遅れんと来てや」

にこやかに手を振る彼女たちにだるそうに片手を上げて見せた男たちは、顔を見合わせると大きなため息をついた。

どうやら、彼女たちのペースに上手く乗せられてしまったらしい。この分では、路線変更はムリだろう。

旅先という解放感から一気にステップアップして、あわよくばイイコトまで持ち込もうという彼らの計画は、ここに頓挫する事が決定した。

彼女たちは、果たして彼らの思惑を知っていたのかどうか。

何はともあれ、彼女たちの作戦勝ちであった。

<そして彼らは……>

羽田空港の出発ロビー。

その片隅で、何やら深刻そうに額をつき合わせている2人の男。
そう、それなりに名前の通った東西高校生探偵たちである。

「どこで間違えたかな？」

「格式ばったトコとか、人が多すぎるトコとか、オレらにとっての
マイナス要素は除いたやんなあ？」

「ああ。蘭たちが好きそうな、こう、アットホームな感じの宿だっ
たし……」

「和葉ら、結構喜んどったし……」

男たちが計画し、彼女たちを誘っての温泉旅行。

幼馴染の彼女たちはいたく喜んで、この旅行の間中、極上の笑顔を惜しみなく零していて、とても上機嫌だった。

「ちょっとぐらい強引にコトを運んでもOKそうだったよな？」

「あの様子やったら、一気に持ってけそうな氣いしたんやけどな……」

「何で、そのチャンスが無かったんだ？」

「無かった言うか、ことごとく潰された言うか……」

「やっぱ、温泉ってトコから間違ってたのか？」

この旅行で、男たちが何を企んでいたのかは取り敢えず置いておくとして、どうやら、反省会らしい。

ちなみに、彼女たちは、出発までまだ時間があるからと、シヨツピングに繰り出している。

「こうなったら、いっそのこと『夕日の見える海岸』なんてどうだ？」

「……相変わらず、氣障なコト考えよるな」

「うるせえ！とにかく、環境変えねえと、にっちもさっちも行かねえだろが！」

「せやけど、4人一緒やと、また同じコトにならんか？」

「年中和葉ちゃん連れまわしてるお前んトコと違って、蘭とこのおっちゃん、うるせえんだよ。今度の旅行だって、和葉ちゃんが一緒だから、やっと許してもらえたんだぜ？」

「……連れまわしとるって……」

「いいよな、お前はよ。チャンスはゴロゴロ転がってんだろ？」

「ふふふふ……」。何度も2人で出かけとるとなあ、そんなモン、影も形もなくなるで？」

反省会は何処へやら。

絶対零度の微笑みの応酬。

見目良い彼らをちらちらと窺っているお嬢様たちを一気に氷付けに出来そうな程の。

「まあ、それは置いといて、とにかく次だ」

「せやな」

「何があるうと、チャンスをゲット！」

「おう！」

彼らと、幼馴染の彼女たちとの付き合いは長い。

東西それぞれ微妙に違いはあるものの、彼女たちの存在は既に彼らの生活の一部になってしまっていて、色々な意味で新たな一歩を踏み出すには、それなりの覚悟と準備が必要だ……と、彼らは思っているようだ。

<そして彼女たちは……>

羽田空港の出発ロビー。

様々な店が並ぶショッピングモールを、楽しげな笑みを振り撒きながら、軽やかな足取りで巡る少女が2人。

「楽しかったね」

「うん。露天の温泉もあったし、ゴハンも美味しかったし」

「お部屋もちょっとレトロな感じで、景色が良くて」

「卓球もやったし？」

「ね？」

顔を見合わせて、くすくすと笑う。

『温泉言うたら卓球やん？』

『ね〜？』

そう言って、渋る彼らをちょっとだけ強引に誘った彼女たち。

何だかんだと言いつつも、遊び始めてしまえば盛り上がるのは当然で。

最後にダブルスを提案したのは、いつも彼らに振り回されてる彼女たちの、ちょっとした意趣返し。

彼らは多分、友人の幼馴染に対してなら、自分たちにするような意地悪な真似は出来ないだろうから。

だから、少しだけ、意地悪してみた……と言うのが、真相らしい。

「本当に楽しかったね」

「うん」

照れたような笑みを交わす彼女たち。

幼馴染の彼らから誘われた温泉旅行。

彼女たちの胸に、甘い展開に対する仄かな期待がなかったと言え
ば嘘になるだろう。

けれど、彼らが自分たちを誘ってくれた事が嬉しくて、少々はし
やぎすぎてしまったかもしれない……と言う反省の込められた笑み。

「また行きたいね」

「うん」

親の承諾を取り付けたり、費用の捻出に頭を悩ませたりと、少々
苦勞はしたけれど、彼女たちにとっては、とても楽しい旅行だった
ようだ。

眠れる姫には内密に

困っていた。

彼にしては珍しい事ながら、本気で困っていた。

冬とは言え、柔らかな陽射しが燦燦と差し込んで、ほんわりと温まった彼の部屋。

昼食を終えた穏やかな昼下がり。

ゆるゆると流れて行く時間に、つい眠気を誘われてしまうのは仕方のない事。

それが、寝不足に弱い彼女なら、尚更。

いや、別に彼女が彼の部屋で眠ってしまうなど然程珍しい事ではない。

その時々で、タオルケットやブランケットを掛けてやったり、横にしてやつたりするのも、彼には慣れた行為だ。

今更、困惑するような場面ではない。

けれど……。

「……………」

今現在の状況を見返して小さく息を付いた彼が、途方に暮れたように視線を宙に彷徨わせる。

ここ数日、何やかやと忙しそうにしている、少々睡眠不足になっていた彼女。

彼もその様子は知っていたから、ベッドに凭れたまま不意に眠り込んでしまった彼女を少し楽に寝かせてやろうと、そっと抱き上げてベッドに横たえてやった。

そこまではいいのだ。

問題は、まだ眠りが浅かったのか、ベッドに下ろして腕を抜こうとした時に彼女が寝返りを打った事とその方向。

膝の裏を支えていた右手は普通に抜けたが、背中を支えていた左手が、彼女の身体の下敷きになってしまったのだ。

その位置が何とも微妙で、彼を混乱させている。

彼の方に身体を向けて、横向きに眠る彼女。

彼の左手は、丁度彼女の脇を抜けようとしていた所。

つまり、彼の掌には今、薄いセーター越しに彼女の柔らかな膨らみが押し付けられているわけだ。

気付かなかったならそのまま手を引き抜いていただろう。

だが、一旦気付いてしまえば、それは容易な事ではない。

彼も、健康な高校生男子なのだ。

宙を彷徨わせていた視線を彼女に戻して、彼はもう一度小さく息を付く。

掌に感じている熱が顔にまで移ったかのように、彼の頬が赤味を帯びている。

——このまま気付かなかった振りをして、強引に手を引き抜いてしまおうか。

——それとも、右手で彼女の肩を支えてそつと引き抜く方がいいか。

未だ、彼女にとって幼馴染でしかない彼の選択肢の中には、この状態を楽しむという項目はない。

——無理に手を抜いて下手に彼女を起こしてしまったら、あらぬ疑いを掛けられるかもしれない。

——とは言え、まるで抱き締めるように腕をまわせば、あらぬ疑いが現実になりかねない。

ぐるぐると、彼の頭脳は終わりのない演算を繰り返す。

太陽はゆつくりとその位置を変えていた。

写真は何でも知っている

朝のざわめきに満ちた改方学園某教室に、軽やかな電子音が流れた。

耳に馴染んだメロディに、友人とお喋りに興じていた和葉が携帯を取り出し、覗き込む。

メールの送り主は、今日はまだ登校していない平次。

「何々？」

「ダーリンからのラブラブメール？」

お約束のように冷やかす友人に、和葉が携帯の画面を向けた。そこに表示されたのは、タイトルも何も無い短いメール。

『首洗って待ってとれ』

「何、これ？」

首を傾げる友人たちに、和葉は悪戯っぽい笑みを見せた。

慌しい足音に続いて、教室のドアが乱暴に開けられる。

「かーずーはーっっっっ！！」

全力で走って来たのだろう平次が、肩で息をしながら叫んだ。

額にはうつすらと汗が滲んでいる。

不機嫌さを隠そうともしない平次に、和葉の周りにいた友人たちが一歩引くが、当の和葉は何事もなかったかのようにその輪から抜け出して、自席についた。

「おはよ、平次」

「オマエ、アレ何やねん!？」

「アレって？」

自分の前に仁王立ちする平次に、和葉は意味がわからないと首を傾げる。

平次の額にぴきつと青筋が立ったのが傍目にもわかったが、和葉は動じていない。

それならば大した事はないだろうと、クラスメイトたちは慣れた様子で、痴話喧嘩に巻き込まれないようにちよつと距離を取りながらも、成り行きを眺めていた。

痴話喧嘩中の二人には周りには殆ど見えていないから、こんな時は放っておくのが一番なのだ。

そして今日も、後々ネタに出来そうな痴話喧嘩が始まった。

「何、他人^{ヒト}のパソコン勝手にいじってんねん！」

「アタシ、ちゃんと断ったよ？ 蘭ちゃんを送ってくれた写真、整理したいから借りるねって。ついでに平次の分は残しとくよって。わかった言うてたやん？」

「それが何であーなる？」

「何が？」

「何で壁紙が工藤の写真になつとんねん!! それも、めっちゃカッコつけたヤツ!!」

「だから平次の分やって。アンタいつも工藤工藤って騒いでるやん? だから、いつでも愛しの工藤君に会えるようにって思って。ア

タシって何て優しいんやろ」

わざとらしく窓の外など眺める和葉に、平次は脱力したように机に両手をついた。

「……………完徹で2時間前に帰って来て、メールだけ見ところ思って立ち上げたら、あの写真やで？ 思いつきり力抜けたわ」

「いやあ、そんなに喜んで貰えて嬉しいわあ」

「喜んどらん！ あんな写真、どっから持ってきた！」

「蘭ちゃんが送ってくれたん。まだまだいっぱいあるから、楽しみにしててや」

「いらんわっ！」

「遠慮しなや。門外不出の秘蔵写真もあるねんで？」

「いーらーんーつつっ！！」

「…………じゃあ、蘭ちゃんのセクシーショットにしようか？」

「は？」

「踵落しキメたとか、裏拳炸裂してるととか。カッコええねんよ？」

「やめてくれ。工藤に殺されるわ…………」

「あ、そうそう！ 今頃、工藤君のパソコンの壁紙、平次の写真になつとるよ？ 工藤君の写真と交換で、蘭ちゃんに送ったったから」

「何やてーつつっ！！」

平次の声に被さるように、携帯が鳴った。

条件反射的に画面を覗き込んだ平次が、一度大きく息を吸ってから、通話ボタンを押した。

「工藤おとおおっっ！！ オマエ、何、姉ちゃん怒らせてんねんっ！！」

『それはこっちのセリフだっ！！ テメエが和葉ちゃん怒らせたんだ

ろーがつ!!』

携帯越しだと言うのに、周りにまではっきりと聞こえるような怒鳴り声は、今話題になっていた工藤。

和葉はと言えば、さっさとその場を離れて、上機嫌で携帯を耳に当てていた。

「蘭ちゃん? うん、もう大喜びやったよ? ……うん……うん……お子様シリーズ? ええなあ、それ」

不毛な罵り合いを繰り広げる男共を余所に、女の子たちは楽しげに次回案の相談をする。

『自業自得』

彼らは何をやらかしたのかはわからないが、これが東西名探偵のクラスメイトたちの一致した感想だった。

噂の彼女は彼女の公認？

『服部に年上の彼女がいる』

改方学園のとある教室からそんな噂が流れたのは、月曜日の事だった。

それだけなら、大抵は時々出て来るガセやジョークだろうと流されて終わるのだが、今回はそうはならなかった。

何故なら、状況証拠があまりにも揃いすぎていたからだ。

目立つ美人と腕を組んで、繁華街をソレ系のホテル方面に歩いて行くのを見たという複数の目撃情報。

午後から登校した平次を正門まで送り届けた外車の窓から見えた、女の影。

気だるげに頬杖をついた平次のガ克蘭から微かに香る、残り香らしき甘い匂い。

そして、欠席している彼の幼馴染。

これが1日だけの事ならば、いつものように面白半分にからかうだろうクラスメイトたちも、この状況が2日3日と続くと、直接本人に事の真偽を問い質すのは躊躇われて、ただひっそりと様子を伺うのが精一杯だった。

その間にも、噂は希望と願望と推測と憶測という尾鰭を順調に育てていき、事件に関係しない噂話になど興味のない平次の耳にも入るようになった頃、4日間欠席していた和葉が登校した。

彼女の、どこかぼんやりしたような元気のない様子に、クラスメイトたちがそっと視線を交わす。

それに気付いているのかいないのか、自分の席にカバンを置いた和葉が、ゆっくりと平次の前に立った。

ごくり……と、誰かが息を飲む気配がする。

「裏切り者」

和葉の第一声に、クラスの空気がピンと張り詰めた。

……が、次の瞬間、その糸はぷつりと切断された。

「人聞きの悪い事言うなや」

「アタシの事、置き去りにしたんは誰やったかなあ？」

「付き合われてクタクタなんはオレの方や！」

「平次が有子さんのコト『オバチャン』なんて言うからやん！」

「オバハンをおバハン言うてドコが悪い！戸籍調べてみい！正真正正銘、叔母ハンじゃ！」

「有子さんが『オバチャン』言われるの嫌いなん、知つとるやろ！？アンタがおバチャンなんて言うから、アタシずっと有子さんに付き合われてたんやで！？」

「夜中に連れまわされとったんはオレやで！？」

「出席日数危ないとか言うて、昼間さっさと逃げてたクセに！」

「久しぶりの日本や言うてはしゃいどるんに付き合ってたら、カラダ幾つあってもたらんわ！」

5日ぶりにクラスメイトたちの前で繰り広げられる普段通りの2人の様子に、教室のあちこちから呆れたようなため息が漏れた。

要するに、噂の彼女は平次の叔母で、平次が疲れていたのも和葉が休んでいたのも、久しぶりの帰国と、甥やその幼馴染との再会に

ハイテンションになった彼女のせいだったと言う事だ。

2人の口論は段々とヒートアップしていったが、クラスメイトたちは我関せずとばかりに雑談に興じ始めた。

尾鰭のついた噂は自由に校内を泳ぎまわっていたが、クラスメイトたちは特に否定する事もなかったため、暫くの間は2人を悩ませる事となった。

甘い誘惑にご用心

服部家の居間は、重苦しい空気に包まれていた。

「もう、終わらんやね……」

「せやな」

悲しげに俯く和葉をテーブル越しに見やって、平次は落ち着いた静かな声で短く応える。

「……もう、終わってもうたんよね？」

「せや。時間は、戻せんのや」

「アタシ、好きやったんよ？」

「……ああ」

「ホンマに好きやったんよ？」

「知っとる。オレも好きやで？知っとるやろ？」

「知っとるから、わからんの！何で？何でなん？」

和葉の震える唇から、叫びにも似た悲痛な声が零れた。

「盛り上がってる所、ワリーんだけどよ、空の皿前にして、何やってんだ？」

縁側から顔を覗かせたのは、新一。

片手に、もう幾つ目かわからない食べかけのスイカを持って、深刻な表情で向かい合う平次と和葉にのんびりとした声を掛けた。

折角遊びに来たのだから日本の夏を満喫すると言って、庭に縁台を出して冷えたスイカなど頬張っていたのだが、2人が中々現れないので様子を見に来たのだ。

傍らの蘭も、まだ手をつけていないスイカ片手に、不思議そうに首を傾げた。

和葉が即座に反応する。

「聞いてよ、蘭ちゃん！工藤君！平次がな、アタシのおやつ勝手に食べてもうたん！」

「勝手にて、自分家の冷蔵庫に入っとるモン喰って、何が悪いんや！？」

「1日限定50個で、買うのめっちゃ大変やったんよ？やっとなんえんに……。返せ！アタシの『いづつや』の特製冷やし善哉！」

「ハラに入ったモン、出せるか！」

「明日買ってきて！利子とお詫びもつけて2つな！」

「……なるほど」

一転して激しい応酬の始まった2人を余所に、新一はスイカに齧り付いた。

「どうする？」

「ほっとこうぜ？」

「そうだね」

あっさりと判断を下すと、新一と蘭は甘いスイカの待つ縁台へと戻った。

やっぱり、彼女にはかなわない

「ね、新一もそう思うでしょ？」

にっこりと微笑む、可愛い彼女。

「……」

悲しげに俯く、可愛い彼女。

探偵たちの頬を伝う、冷たい汗。

全ては2時間前に始まった。

東西高校生探偵が揃って出掛けると、必ず事件が起こる。

多少誇張された感はあるが9割方当たっていると、彼らの大事な彼女たちはため息をつく。

そして、今回もまた遊びにきたテーマパークで事件が起きて、飛び出して行った彼らによって犯人はすぐに突き止められた。

後は警察に任せるだけ。

その時に、新たな事件が起きた。

追い詰められた3人の犯人たち。

何とか逃げ道はないかと見回した先に、2人の少女。

3対2。

男と女。

勝算を見出した犯人たちは、少女に向かって突っ込んで行く。

「あ、アホ!!」

「やめろ!!」

探偵たちの制止の声は届かない。

「どけえっ!!」

先頭の男が繰り出したナイフが、和葉のリボンを裂く。

はらりと散った一筋の髪。

その一瞬後、蘭の蹴りで2人が沈み、和葉に関節をキメられた一人が情けない悲鳴を上げた。

「あゝあ」

「せやから、止め言うたやろ？」

呆れたような探偵たち。

沈んだ2人はそのままに、和葉が押さえた男を新一が引き受けて駆け寄ってくる警官たちを待とうとした所で、蘭の悲鳴が上がった。

「和葉ちゃん！顔に傷がつ!!」

ぎくつとして動きを止める探偵たち。

平次が慌てて確認する。

和葉の頬には、うっすらと血が滲んでいる。

「大丈夫、掠り傷や」

平次の声は、彼女たちには届かなかった。

「……新一、そいつ殺ってもいいよね？」

「……え？」

「女の子の髪を切った上に顔に傷をつけるなんて、言語道断っ！！
万死に値するわっ！！ね、新一もそう思うでしょ？」

両の拳を腰に引き付け戦闘準備を整えて、にっこりと、それはそれは可愛らしい天使のような微笑を浮かべる蘭の背後には、炎さえ瞬時に凍りつかせるだろう絶対零度のブリザードが吹き荒れている。

「う……うん、そうだね。俺もそう思うけど、殺人はマズいんじゃないかなあ……なんて……」

「『殺人』じゃなくて『天誅』よ。ね、そうでしょ？」

「そ……そうとも言えるかな……？」

「ね？」

「あ……でも……蘭が手を汚すことはねーよ、うん」

一方、こちらは周りのもの全てを焼き尽くしそうな程の、灼熱のオーラを纏った少女。

「アタシの髪……」

「どっこもヘンなトコないで？そら、リボンも切れてもうたけど、

髪は大丈夫や！それにな、リボンなら、オレがなんぼでも買うたるし……」

「キズ……」

「ああ、大したことあらへん！明日にはきれーに治っとるって！やから、落ち着けや？」

「……髪……」

「せ、せや！これからリボン買いに行こうや」

「……キズ……」

「その前に手当てやな、うん」

犯人の事など、既に探偵たちの頭にはない。

しどろもどろになりながら、ただただ彼女たちを宥めようと、その頭脳をフル回転させる。

その割りに言ってる事は月並みだったりするのだが、彼らにとってはどんな難事件よりもずっと難しい事なのだ。

滅多に本気でキレル事のない彼女たち。

本気でキレた時の恐ろしさは、多分、彼らしか知らない。

やっぱり、彼女にはかなわない（後書き）

元気に楽しく普通の高校生をしている彼らを楽しんで頂けたなら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3743b/>

彼女にはかなわない

2010年10月9日22時02分発行